



「成層圏オゾンが生物を守る」

(気象ブックス9)

関口理郎 著、成文堂書店、
2001年7月、168頁、
定価1600円(本体価格)

この20年ほどは、気象や大気科学の普及のための良書が数多く刊行されてきた。その意味で、読者の目は相当肥えているにちがいない。そういう目にも十分応えてくれる本が1つ加わった。それをここに紹介したい。

本書は、オゾンに関する総合的な知識を集約したもので、オゾン科学がどのようにして地球環境問題と関わったか、その全体が把握できるように丁寧に書かれている。著者はオゾン研究の初期の段階から第一線で貢献してこられたので、こういう問題の解説者として最も相応しい人である。

本書は、次のように構成されている。

プロローグ

- 第1章 成層圏とは
- 第2章 大気の世界
- 第3章 成層圏探究の歴史
- 第4章 オゾン層研究の歴史
- 第5章 大気オゾンの分布
- 第6章 オゾンホール
- 第7章 オゾンに係る成層圏の微量成分
- 第8章 オゾン層破壊と紫外線の脅威
- 第9章 オゾン層保護条約

エピローグ

参考文献

この構成をみて直ぐにお分かりのとおり、オゾンを理解するために、先ず、成層圏という非日常世界から解説を始め、なぜオゾンという微量成分が重要であるかを説明する。このことから、オゾンが昨今の地球環境問題として登場してくる前から、大気にとって重要組成であることが納得できる。オゾンは人間が勝手にいじくってはいけない大気成分であることをしっかりと分かるように書かれているのは、読者にとって大変ありがたい。

日本におけるオゾンの研究はしばしば世界的にも高く評価されてきた実績があるが、本書には日本人研究者の活躍がところどころで登場する。こういう部分の

記述は著者にとっても思い出深い何かがあるに違いない。著者は、オゾン研究の中でも特に観測研究や気象庁における観測システムの構築に対して多大の貢献を果たしてこられた。この功績で、日本気象学会の藤原賞や(財)日本気象協会の岡田賞など受賞しておられる。その他、オゾン研究のための国際交流にも尽力されてきており、世界の科学者の中で著名である。こういう著者であるので、本書に登場してくる外国人研究者、日本人研究者の多くの人の生の呼吸を感じながら記述されたのだろう。この辺りが、オゾンの他の類書とチョット違うところである。この著者にしか書けない所以である。

また、本書には、オゾンにおいて典型的に見られる環境保護の重要性が長い間の地味なオゾン研究の成果に基づき認識できたこと、そして、その保護の方向で科学が役立った経緯を誇りとして記述されている。科学が健康な形で貢献できたことへの科学者としての喜びの気持ちかも知れない。オゾン問題は一段落した感が世間にただよっているが、おそらくそんなには簡単に終わる問題ではないだろう。温暖化問題とも関係していそうだし、まだまだ人間の浅知恵では予想すら及ばない問題が出現してくる可能性はある。その時のためにも、深く深く、広く広く研究の鍬を入れておかねばならない。こういう心を大切にすると、本書は教えてくれている。

「気象ブックス」シリーズの刊行の趣旨をみると、第9号として出された本書こそ、シリーズの趣旨を最も忠実に実現したものであることになる。しかし一般社会人のような非専門の人にはやや難しいかなと思う記述が無いわけではない。その程度ならば、噛み応えがあるということであって読書意欲につながるだろうから、特に問題にはならないと考えられる。それよりも、オゾンというささやかな微量成分に驚くべき存在の意図があり、我々の生命や地球の生命がそれら微小なる存在に守られている不思議さを本書によってじっくりと学んで頂けることの方が大事であろう。一般の社会人向けと称して、あまり専門的に深い知識の裏付けのない人が解説を世に出し、結局、読者の得るところのない結果に終わらせてしまうぐらいなら、少しはたまたまを整えて、確認しながら読み進む本書のような解説こそが、真に求められていたものであることに気付くだろう。

(京都大学大学院理学研究科 木田秀次)